

芸術新聞社

# 中国 詩人伝

駒田信二



芸術新聞社

# 中国詩人伝

駒田信二



駒田信二 こまだ・しんじ

作家・文芸評論家・中国文学者。一九一四年三重県に生まれる。著書は『島』『脱出』『一条さゆりの性』（小説）『魯迅作品集』『水滸伝』『棠陰比事』（翻訳）『対の思想』『谿の思想』『遠景と近景』（評論）『中国書人伝』（評伝）など多数。一九四〇年東京帝国大学文学部支那文学科卒業後、旧制松江高校教授、島根大学教授、早稲田大学教授などを歴任。

## 中国詩人伝

一九九一年七月二十日初版第一刷発行　一九九二年八月一日初版第二刷発行

著者——駒田信二

発行人——小針代助

発行者——株式会社芸術新聞社

東京都千代田区神田保町三―一七―二八 協同第一ビル 郵便番号一〇一

電話〇三―三三二六三―一六三八（代表）

電話〇三―三三二六五―四五七九（編集部）

振替・東京四―一九五五五

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——図書印刷株式会社

© Shunji Komada, 1991. Printed in Japan

ISBN4-87586-042-0 C0023

定価はカバーに表示しております。

乱丁本・落丁本は小社販売係までご送付下さい。送料小社負担でお取り替え致します。

中国詩人伝・目次

曹操·曹丕·曹植

陶淵明 27

謝靈運 48

王維 68

李白 87

杜甫 104

岑參 122

韓愈 142

白居易 161

李賀 181

杜牧 201

あ と が き	袁 宏 道	高 啓	陸 游	黄 庭 堅	蘇 軾	王 安 石	李 商 隱
350	330	311	293	275	257	238	220

装本・大橋 彰

中国詩人伝



## 曹操・曹丕・曹植

魏（二二〇—二六五）、蜀（二二一—二六三）、吳（二二二—二八〇）の三国の歴史を国別に記述した史書『三国志』（晋の陳寿撰）は、魏を正統の王朝とみなして書かれているので、武帝（曹操）以下魏の帝王については、これを貶しめるような記述はほとんどない。

これは、晋が、形式的には禪讓（帝位を譲り受ける）というかたちで魏から政権を受けついで国であること、及び撰者の陳寿（二三二—二九七）がその晋に仕えた著作郎（歴史編纂官）であったことによる。

だが、小説『三国志演義』は正史の『三国志』とはちがって、蜀を正統とみなし、魏を篡奪者とする立場で語られている。したがって、魏の曹操は悪玉、蜀の劉備は善玉として、物語は進展していく。善玉を補佐した関羽、張飛、諸葛孔明は美化される。

わが国にも「判官鼻眞」ということばがある。いうまでもなく、判官とは九郎判官源義経である。義経の前半生のはなばなしい活躍に喝采をおくり、その不運な晩年に同情して声援をおくる気持を「判官鼻眞」という。『三国志演義』で劉備が善玉にされているのは、この「判官鼻眞」なのである。善玉を際立たせるためには悪玉をも活躍させなければならぬ。当然、強者であり勝者となった曹操

が悪玉にされるのである。

さきに『三国志』を「正史」といったが、「正史」とは正しい歴史という意味ではない。官製の歴史を「正史」というのである。『三国志』と『三国志演義』とをくらべる場合、『演義』が「判官鼻眞」であることは否めないものの、『三国志』は正史であるからすべて事実であり、『演義』は小説であるからすべて虚構であると決めつけることはできないのである。正史にも事実ではない記述もあり、また、事実よりも伝説とか巷間の説話の方が真実を伝えているということもあり得るのである。

その点も踏まえた上で『演義』からはなれていえば、曹操はすぐれた武将（戦略家）であり、すぐれた政治家（策略家）であったと同時に、また、すぐれた文学者でもあった。中国文学史上「建安文学」と呼ばれる画期的な一時期（古代から中世への過渡期に、「文学」を自覚した作品が創造された一時期）をうちたてた功績者であって、彼が後漢の宰相であった建安年間（一九六―二二〇）には、その正夫人卞氏とのあいだの長男曹丕（文帝。一八七―二二六）、三男曹植（一九二―二三二）をはじめとして、いわゆる「建安七子」の孔融（字は文舉）、陳琳（字は孔璋）、王粲（字は仲宣）、徐幹（字は偉長）、阮瑀（字は元瑜）、応瑒（字は徳漣）、劉楨（字は公幹）ら、数多くの文学者が輩出したが、彼らはみな曹操の幕下に集まった人たちであった。

曹操（字は孟徳。一五五―二二〇）の著作として今日も残っているものには、断簡をふくめて百数十篇の文と、二十余首の詩がある。それらのなかで最も広く知られているのは「短歌行」であろう。「短歌行」というのは漢代の楽府の題だが、漢代のもので残っている作品はなく、曹操のものが今日

残っている最も古い「短歌行」である。短歌とは楽曲リクムの長短による名であって、歌詞の長短にはかわりがない。

曹操の「短歌行」は三十二句から成る長い歌だが、内容的には八句ずつ四節に分けることができる。

對酒當歌 酒に對し歌に當る

人生幾何 人生幾何ぞ

譬如朝露 譬えば朝露ちやうろの如し

去日苦多 去日きじつ苦くだ多し

慨當以慷 慨がいして當まさに以て慷こうすべし

憂思難忘 憂思ゆうし忘れ難がたし

何以解憂 何を以てか憂うれいを解とかん

惟有杜康 惟杜康有るのみ

酒を飲もう、歌をうたおう。／人生は短いのだ。／すぐ消えてしまふ朝露あまつゆのようににはかないのだ。／月日はどんだん過ぎてゆく。／なげかわしいことではないか。／憂いばかりが心に残るのだ。／何によってこの憂いを消せばよいのか。／それには酒がいちばんよい。

青青子衿 青々せいせいたる子しが衿えり

悠悠我心 悠悠我心が心

但爲君故 但君の爲の故に

沈吟至今 沈吟して今に至る

呦呦鹿鳴 呦々と鹿鳴き

食野之苹 野の苹を食う

我有嘉賓 我に嘉賓有らば

鼓瑟吹笙 瑟を鼓し笙を吹かん

「青々たる子が衿／悠悠我心が心」という詩がある。／私も君たちのような若い友を得たくて、  
／いままで思いなやんでいたのだ。(そのよき友が今得られたのだ)／「呦々と鹿鳴き／野の苹を食う。  
／我に嘉賓有らば／瑟を鼓し笙を吹かん」という詩がある。(そのように私も君たちをもてなそう)  
ここに引かれている二つの詩のうち、はじめの詩は『詩経』国風の鄭風の詩「子衿」から取って  
る。三節から成るその歌の第一節にいう。

青青子衿 青青たる子が衿

悠悠我心 悠悠我心が心

縱我不往 縱我往かずとも

子寧嗣音 子寧ぞ音を嗣がざる

青い衿の若者よ、／私はあなたのことを思いつめています。／たとえ私がお訪ねしなくても、／あなたはどのようにしてお便りぐらいくださらないのですか。

女がうたう恋歌である。四句のうちのはじめの二句を「短歌行」は取っている。

あとの方の詩は、これも『詩経』の、小雅の「鹿鳴」から取っている。三節から成る詩の第一節にいう。

呦呦鹿鳴 呦々と鹿鳴き

食野之苹 野の苹を食う

我有嘉賓 我に嘉賓有らば

鼓瑟吹笙 瑟を鼓し笙を吹き

吹笙鼓簧 笙を吹き簧を鼓し

承筐是將 筐を承けて是れ將めん

人之好我 人の我を好せば

示我周行 我に周行を示せ

鹿はたのしげに鳴いて（友を呼び集め）、／ともに野の草を食んでいる。／私にもよい客がくるならば、／瑟をひき笙を吹き、／笙を吹き簧を鳴らし、／絹をいれた竹箱をつつしんで進呈しよう。／客よ、もし私に好意を持ってくれるなら、／私に大道を教示してほしい。

客を迎えて宴樂するときの歌である。八句のうちのはじめの四句を「短歌行」は取っている。

つまり「短歌行」のこの第二節は、八句のうち六句を『詩経』の二つの詩から取っているのである。

明明如月 明々たること月の如し

何時可掇 何れの時にか掇る可けん

憂從中來 憂中より来りて

不可斷絶 断絶す可からず

越陌度阡 陌を越え阡を度り

枉用相存 枉げて用て相存す

契闊談讌 契闊談讌して

心念舊恩 心旧恩を念う

月のように光りかがやく人材がいる。／だが、光をすくい取ることができないのと同じように、人

材を仲間に入れることはなかなかできない。／そのことを思うと、憂いが心のなかから湧きあがってきて、／断ち切ることができない。／ところが君たち人材は、はるばる田野の道をふみ越え、／わざわざ私をたずねてきてくれたのだ。／久しぶりに酒をくみかわして語り合おう。／君たちの昔ながらのよしみが私にはうれしいのだ。

月明星稀 月明らかに星稀に

烏鵲南飛 烏鵲南に飛ぶ

繞樹三匝 樹を繞ること三匝

何枝可依 何れの枝にか依る可き

山不厭高 山は高きを厭わず

海不厭深 海は深きを厭わず

周公吐哺 周公哺を吐きて

天下歸心 天下心を歸す

月は明るく空にかがやき、星影はまばらである。／その月光の下を烏鵲は南へ飛んでゆくとうとする。／だが、烏鵲は樹木のまわりを何度もぐるぐるまわって、／どの枝に宿ろうかと迷っているようである。(宿るべき枝がなければわが庭にくるがよい)／山はいくら高くてもよい。／海はいくら深くてもよい。(人材はいくら多くてもよい)／昔、周公は一回の食事のあいだに、三度もいったん口に入

れた食物を吐いて、訪ねてきた客に会ったという。それほど有能な士を大切にしたいのだ。／そのため人々はみな周公に心を寄せた。(私も周公のように有能な士を大切にしたいと思っている)

第一句の「月」は曹操自身、「星」は曹操が破った群雄たち、第二句の「烏鵲」は野の遺賢、と解釈することもできない。第五、六句の「山不厭高、海不厭深」は、春秋の齊の宰相管仲(？―前六四五)の言行録といわれる「管子」に、「海は水を辞せず、故に能く其の大を成す。山は土を辞せず、故に能く其の高きを成す。明主は人を厭わず、故に能くその衆きを成す」とあるのに拠る。最後の二句は、周公旦の故事。周公は食事をしているときに來客があると、何度でも、口にふくんだ食物を吐いて会いに出て、賢士を引見することにつとめたという。

曹操のこの「短歌行」は、後に作られる蘇軾(東坡。一〇三六―一一〇一)の「前赤壁賦」によって、一層世人に知られ、愛唱されるようになった。「前赤壁賦」にいう。

月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶ。此れ曹孟徳の詩に非ずや。西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川相繆い、鬱乎として蒼々たり、此れ孟徳の周郎(呉の将周瑜)に困しめられし者に非ずや。其の荊州を破り、江陵を下り、流れに順いて東するに方るや、舳艫千里、旌旗空を蔽う。酒を灑ぎて江に臨み、槩を横たえて詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安くに在りや。

「酒を灑ぎて江に臨む」とは、酒を水にそいで川の神を祭ること。地上では酒を土にそいで地の神を祭る。蘇軾のこの「前赤壁賦」は「三国志演義」の第四十八回「長江に宴して曹操詩を賦す」を踏まえているのである。「演義」では、曹操がこの歌をうたい終ると、一人の将が進み出て、